

「森・水・自然を資産としたまちづくり」

元額田町長
鈴木啓允



皆さんおはようございます。只今、紹介いただきました、旧額田町の最後の町長を務めさせていただきました鈴木啓允と申します。私は大変微力者でございます、無学な人間であり、浅学菲才な身であります。そういう者が今日のように本当にご見識高い大勢の皆様の前でとてもお話しするような立場ではございませんけれども、せっかくの良い機会をこうして与えていただきましたので非常に光栄に思っております。この1時間半というのをどうかお付き合いいただけたら有り難いと思っております。

自己紹介ですが、今ご紹介いただいた通りでありますけれども、もう少し触れてみたいと思います。下手な絵でありますけれども、私のスケッチであります。これが私が生まれ育った旧額田町の桜形地区を江戸時代ぐらいの雰囲気に描き上げてみたわけであります。まさに山に抱かれた地域で生まれ育ちました。現代の風景というのはこのような感じで



すけれども、実はあとからもビデオ等で触れますけれども、私の家の前にログハウス村を建設致しまして多くの皆さんに都会の方から来ていただいております。そこに展望台も自分で朝早く起きて15メートルぐらいの高さのものを造りました。そこから眺めた風景でございます。この中に日近城趾というのがございます。これは山城でございます、かつて戦国時代に奥平氏が治めておった所でございます。この歴史に触れると結構1時間も2時間もかかってしまいますので、極く簡単に申し上げますと、奥平氏は奥三河をずっと治めておりまして、これはいわゆる西側の方の出城でございます。奥平氏はですね、長篠の合戦で長篠城を守り抜いた人で、「良く守り抜いた」という事で、徳川家康がご褒美として長女の亀姫さんと結婚させてくれたわけですね。それが非常に良い運になりまして、奥平家は正に徳川幕府の大名となりまして、最終的には諸国を転々と治めたわけでありまして。今は大分県の中津市、中津藩を明治維新まで治めました。中津のお城は15万石の立派なお城であります。そこには19代の奥平政幸という殿様がお見えになります。僕より少し若くて加山雄三さんにそっくりのような人です。まだ独身です。私は町長に就任して、この方達と徹底的に交流を深めました。同時にですね、日近というのは皆さんもう分かっていただいておりますけれども、かつて私たちの地域でも十数年前は「ひじか」と読む人はあまりなかった。「にっきん」と読んでみたり、あの上になんかお城の跡があるらしいという地元でもそのくらいだったんです。私たちの生まれた所のこんな素晴らしいものをどうやって外に発信していくか、光るものを当てていくか、誇りをつくっていくかという事で考えたのが、今日もそのメンバーも来てくれているようですけれども、「日近太鼓」というものを結成致しました。とにかく外に発

信、まあ宣伝部隊というもので随分やってくれます。岡崎でも「日近太鼓」とかこの歴史の事を随分知っていただけるようになりました。NHK等のテレビも出たり、万博にも出たりという事で、これがまず町づくりにおいて如何に自分たちの地域を発信するかということの必要性を感じました。後にもちょっとこの事については触れて見たいと思います。

これが今、日近の里で新しく架かった橋がで「日近橋」という名前を付け、奥平の殿様がわざわざ来て渡り初めをやってくれ、また橋の名前とか文字を入れてくれたりしました。一方で、旧額田ではご承知の通り南の方へ第二東名が走ります。私が辞める頃には用地関係の話まで入っていましたがけれども、まだ本当に農村風景の状況でありませぬ。ここにインターチェンジも出来まして、これが第二東名のつもりで描きました。こんな感じでございませぬ。これから大いに発展してくれと思ひます。

これはすぐ近くにあります大きな楠であります。樹齢1,200~1,300年。直系が2~3メートルぐらいあると思ひます。周りに御堂があるんですけどもこれぐらい大きい楠があります。また北の方には大杉という同じぐらい樹齢1,200年ぐらいの大きな木がありますが、結構こういう巨木が額田にはあります。

これが先ほどご紹介いただきました茅葺屋敷千町でございませぬ。このパンフレットの中にございませぬが、この事には少し触れてみたいと思ひます。けれども、私がこういう絵を確か十数年前、議員の頃に描きまして、結構自分なりにこの茅葺屋敷というのを気に入っておったわけです。何とかこれを残したい、残せないかと思っておりました。やはり議員という立場ではなかなかそこまでは出来なかつたんですけれども。この茅葺屋敷にはおばあちゃんがおられたんですけども、おばあちゃんも病気のため息子さんのいる名古屋や東京の方で面倒見ておつていただいて、段々朽ちてきてしまったわけです。

私が議員の頃に「議会だより」というものを額田町内全家庭に約3,000部くらいですけれども、議会終了後に必ず発行しておりました。その隅にこのような絵を入れたり、手紙などの絵に使つたりといろいろ下手な絵をずっと入れさせていただきませぬ。その中でやはり持ち主に許可を得なければいけないという事でおばあちゃんの所に名古屋におられた時に手紙を出しました。絵とともに自分なりに使わせていただきたいと思ひ



しますと言ったらおばあちゃんが本当に喜んで手紙をすぐくれました。「私は農村の原風景の私の家である茅葺屋敷、裏にある棚田と色々なものが大好きで大好きで、どうしても私の手で残していきたいと思っておったけれども、林業がこのように衰退しちゃって茅葺屋敷ひとつ直すにしてもとてもお金がかかっちゃってやれなくなってしまった。そうやって絵だけでもいいで残していただければ有り難い」というお手紙をいただきました。まあそれから後ですね、私が町長に就任してすぐにこの茅葺屋敷を交流の拠点にしようという事で地元と話し合っ、東京の息子さん娘さんのところに借りに行くわけですが、その時におばあちゃんの手紙を持っていきました。かなり日にちが経っておりまして、家中一日かけて手紙を探しました。おばあちゃんはこの気持ちで絵だけでもいいで残して欲しいという気持ちでおられるという事を息子さん達に、手紙を持って行きましたら、息子さんも娘さんも涙ぐんでそういうおばあちゃんのお気持ちというのは良くわかるで、まあ結論としては額田でそうやってきちんと残して貰えればという事で、無償でお借りする事ができました。これが本当に有り難かったひとつでございます。

これが次のおおだ山でございますけれども、これが額田の旧役場、現在合併して岡崎市の額田支所であります。この裏に丁度この辺では“額田富士”ともいう人もありましたけれども、「おおだの森」というのがあります。これもパンフレットの中に大きく出ております。これは東京のある雑誌の出版社が取材に来てくれて本で出してくれた一部でありますけれども、まちづくりにかける事で紹介していただいたのがコピーして皆さんの所にお配りしております。「おおだの森」を桜と紅葉一面の山にしちゃおうじゃないかという事、これも私は議員になった頃から役場へ行くようになって、「裏に素晴らしい山がある。これは必ずこの地域に力になる事にしてみたい」という気持ちを持っておりました。ある議員達ともそういう話をした事がありますが、何か夢物語だなというような感じでずっと済んでおりました。しかし私個人としては、自分が林業をやっており、自分で重機、ユンボだとかブルに乗って朝早くから林道を造ったりいろんな事をやって、山の上に上がれば凄く良い場所があるという事を常に思っていたわけです。自分で林業若かりし頃からずっとやっけていまして、そういう中で山の上とにかく道路を引っ張り、そして山の上はいくらこういう田舎でも良い場所がいっぱい取れることを感じていました。丁度岡崎の中央総合公園のようなやり方です。「おおだの森」を桜と紅葉の山に一面にしちゃって第二東名がやがてできて、高速道路を走る人達がこの山を見て驚いて、



どんどんインターチェンジから降りてきてくれる。こういう夢を見て、地元の人たちと話し合いました。おおだ山の場合はですね、この80町歩から100町歩くらいの面積ですが、約100人ぐらいの所有者がいます。「ただで貸してくれ」と言いましたら、地主さんたちは「町がただで借りるなんていう馬鹿な事ない」と随分言って叱られましたけれども、まさに夜なべ談義をして夜遅くまでその地域の人達とまさに膝をつき合わせて、鍋をつつきながら一杯飲みながら話あいました。「とにかくじゃあこの山、100町

歩の山が今このままほかっておいたってこの地域の力になる？残念ながらならない。是非私たちに貸していただければ必ず将来5年、10年、100年先にはまさに今足助迎りでやっておりますように素晴らしい地域の力になってくれるで、何とかやらせて下さい。」まあこういう事を言って結果的に80町歩の山を無償で貸していただくことになりました。徐々に徐々に桜を植えております。それもパンフレットを見ていただくところまで細かく解説しておりますので宜しくお願いします。

今私が町長を辞めましてから家業の林業に専念しております。林業が駄目だ駄目だといいいながらもですね、もう一回昔色々やってきた機械化林業というものでチャレンジしてみようという事で、新しい機械も入れて、いくら駄目だといってもとにかく先代から繋がっている山というものをほかってしまうわけにはいかない。また私も講演活動で山というものを今森林がどういう事になっておるかという事を一生懸命訴えて、こういう事をやっていかなければ駄目だといいいながら、じゃあお前の山はどうなっているんだと言われたら、実はちょっとなんていうような事ではいけないという事で徹底してやっていこうという気持ちで今やっています。子供たちにもこういう事を良く知っていただくという事で、近くの形埜小学校というのがあるんですけども、ここで林業の授業をこの数日、まあちょいちょい講師みたいに行ってるんですけども、こんなふうにやっております。これは今林業の仕事をやっている現場であります。空中ケーブルのようなものが今リモコンで全部走らなくなっております。そういうものに木材をかけて出してくるとか。ユンボの先に手づかみで木材を掴んでやるような、結構省力が出来るような機械がたくさん今出ております。なかなか値段は張りますけれども、とにかくこういうものでいろいろチャレンジしていこうという事でやっております。



その中で間伐材が山に捨ててあります。そうした間伐材を「是非利用して下さい。」という事で新聞やNHKで出していただきましたら、多くの皆さん、岡崎の方も見ておりましたけれども結構名古屋、知多とかの方が多いですけれども、是非自分達の手でそういう間伐材を山からズリ出して家を造って、ログハウスを造ろうという事で、多くの皆さんが私の山や、また私の友人達の山でチャレンジをしておってくれます。これが完成品であります。ゲストハウスというような形で、例えばタベも仲間達とここで色々会合をやりました。また合併協議会の中でもですね、実は岡崎の幹部の皆さんと料亭やそんな所で話をするより俺んこの山小屋へ来いよというような所で、手作りの料理で丸太小屋の中で随分何回もやりました。今もそのような事を続けております。さて、自己紹介が非常に長くなってしまいましたが、ここから本題に入っていきます。



私の生年月日は昭和18年12月24日でございます。おや？と思われると思いますけ

れどもキリストさんが生まれた日と同じであります。これは私の両親の腕の良さであります。妙技であります。安城農林の高等学校の林業科を卒業致しまして、すぐに家が代々林業でございまして、7代目の林業を一生懸命やってきたつもりであります。親父も私と同じような道を行っておりましたので、実際家業の事はあんまり出来なかった事は確かではありますが、私が若い頃はほとんど私が中心でした。その当時私からいうとおかしいですけれども、林業というのは本当に良かったです。お金の事をいっちゃあおかしいですけれどもなかなか儲かったわけです。木材の価格もうんと良かったですから非常に良かったです。当時ですね林業青年ということで、林業の体験発表などに出させていだきまして、手前味噌ですけれどもありますが全国大会で優勝した事もあります。当時『明るい農村』というテレビがありましたけれども、それにも出していただいて海外・国内狭くぐらいに林業青年ということで随分そこら中へ行きました。その林業青年の仲間達が今しっかりした交流を全国で結んでおります。その中では、私がこういう立場になって一番力になってくれたのは、その当時から林業青年と一緒に頑張ってきた熊本県の小国町という所がありますけれども、ここに宮崎暢俊という人間がおります。これは私と同年でございましてけれども、今確か町長を7期、8期ぐらいやっております。今日横山先生もおられますけれども、林業に関しては全国でも本当にもの凄い名声、名を売っておる宮崎暢俊町長でありますけれども、非常に私も一年に何回も何回も行って、彼の町づくりに本当に感動しております。私の所へも来てくれて旧額田であれだけ有名な人間が講演会をやるという事になって額田町中大騒ぎでありました。泊りは岡崎の高級ホテル、名古屋の高級ホテルに泊めないといかんじゃないとか、そこまで当時町の人が心配してくれました。僕はまだその時、議員でありましたけれども、そうしたら本人来て「そんな高い所に泊まる必要ない。鈴木啓允の所に泊まれば良いんだ。」という事で、僕の所へ泊まってですね、一緒に朝味噌汁など食べてと、そんなような仲でありますけれども、町づくりに関して師と仰いでおります。

そんなようなお付き合いの中で、私が32才で先ほどお話いただいたように議会に出まして、5期半目ぐらいに町長に立候補いたしました。私は若い仲間が随分おりましてわいわいやってくれましたらなんだか本当に町長になってしまいました。今まで本当に仲間達が一生懸命やってくれた事をうれしく思っておりますが、その仲間達が、ある時私が町長になったら何か言葉が変わって来た。「町長さん」と呼んでみたり、何だか「先生」って呼んでみたりする。そういう呼び方は大嫌いで、そんな事を僕に対して呼ぶんだったら、俺は本当に孤独になってしまう。僕たちの立場というのは本当に仲間がおって、色々な事を教えてくれてそしてやっていく。それが本当に行政で、奉られて良い気になっておって、何が起きているか分からんような町長では絶対に駄目だという事は良く分かっております。だから、やい、おい、馬鹿ぐらいの事までいって毎日あります。今でも同じであります。

1. 額田地区の今後の役割 「合併」

今日は「森・水・自然」というこういうテーマでお話をさせていただくのもう既にこんなに時間がかかってしまいました。で大体頭の中に入れてきた事を書き出しておりますので、急いでレジュメに従って進めていきます。まず合併でございます。本当に合併についてはですね、もう早いもので1年迎えようとしておるわけです。岡崎との合併

でのスローガンはご承知の通り「人・水・緑が輝く活気に満ちた美しい都市おかざき」これが新市の建設計画でございます。それに向かって輝かしくスタートしていただいたわけでありまして、私達旧額田の町民はこういう素晴らしい岡崎に仲間入りさせていただいて本当に光栄に思っております。新たなステージの上で、岡崎の前々からの市民の皆さんと一緒に手を組んで、町づくりに邁進して行かなければ、行きたいと思っておりますので、宜しくご指導していただきたいと思っております。何と云っても旧額田の森林というのは、面積の86%を占めております。額田地区の合併後の役割は、美しい大自然とそこから湧き出ずる清流をしっかりと守って、こういう美しい自然、水、そういうものを岡崎の皆さんと共に共有していくという事にあるわけでございます。皆様ご存知だと思いますが、本宮山、これは標高約800メートルでございます。旧額田地区は、これを頂点にいたしまして、緑深い山々に抱かれまして、そして母なる乙川、このせせらぎを常に耳にして春夏秋冬、いわゆる四季が織りなす大自然の営みというのは、まさに今の山紫水明というこの言葉にマッチしておるわけでありまして、山紫水明の郷でございます。悠久の時の流れの中で先人達がですね、各村々で何代も何代も色々なものを引き継いでいきまして、そして素晴らしい歴史・文化・伝統・慣習等々をしっかりと作り上げて残してくれたわけでありまして、更にですね、こういう本当に恵まれた地域、環境下の中で、温かい人情というものも確かに育まれてきたわけでありまして、私の口からこういう事を言うのは大変恐縮なんです、額田の地はですね、「人情厚き現代の別天地」とまで言っていただく方が本当に随分おられます。有り難く思っております。本当に「安らぎの空間」というものと「癒しの地域」こそが今の現代病や非常に難しい社会での心の病、想像の出来ないような大変な事件、乱れた社会中で最も必要であることは皆さんも十分痛感しておられると思っております。是非これから岡崎の奥座敷として可愛がっていただきたいと思っております。現在その岡崎市として「森の駅構想」として色々手がけておっていただきありがたく思っております。新聞紙上でもご承知の通り、いわゆる交流の拠点というものを線で結んでいく。線というのは道路であります。そういうものをしっかりと結んで多くの皆さんにどんどん旧額田地区に来ていただける、そういう「森の駅構想」というものを今着々と進めておっていただくのでありまして、ありがたく思っております。

2. ふるさとへの愛着、まちづくりの原点

次にレジュメに従ってずっと進めますが、故郷は一つということでありまして、これはですね、10ヶ月前の昨年の大晦日までは、当然額田の町民に「あなたの故郷はどこですか」と訪ねれば、私達も当然「故郷は額田町であります」と答えておりました。しかし一夜明けてですね、あなたの故郷はと訪ねれば、当然岡崎市であります。このようにですね、同じ故郷を持つ同士として思いはひとつ。やっぱり限らない故郷への愛着であります。それが必要であります。私達も故郷岡崎として色々この岡崎市一員として行動を共にしていただきたいと思っております。旧額田町民にとりましては、確かに額田という地名が消えてしまったわけでありまして、これは間違いなく一抹というよりも本当に寂しい隠しきれないものは当然あるわけですが、このような本当に素晴らしい岡崎というものが故郷になったという事が、将来の大きな夢を託しておるわけであ

ります。夢がたくさん膨らんでいるわけでありまして。そして故郷大好き、そして故郷に本当に愛着というものがあってこそ町づくりに真剣になれるわけでありまして。それがいわゆる「誇り得る故郷づくり」をやろうと、そういうものに繋がっていくわけでありまして。そういう気持ちで住民が一つになっていくという事が非常に必要であります。それは何といたっても故郷が大好きであるという事から始まるわけでありまして。誇り得るものを作っていこう。それが一つになってこそいわゆる連帯感というものが生まれていくわけでありまして。ここでいう連帯感というのは当然住民同士の連帯感、絆であります。そして行政と地域とのしっかりした連帯、繋がりが非常に出来ていくわけでありまして。これが町づくりの大きな最高のエネルギーになっていくわけでありまして。町づくりについては、やっぱり住民が参加という事が基本であります。これを私達は徹底的に訴えてきました。他力本願では絶対出来ない。住民主役、いわゆる住民が参加だけでなく、あなた達が主役だという事。そういう状況になってくると住民が何をやるかという選択肢が広がっていくわけでありまして。夢が広がっていきます。そして住民自らが企画をして立案をして最後にはそれが働き手になって頑張ってくれるわけでありまして。そういう一連の動きの中から、地域コミュニティというものが育っていくわけでありまして。地域コミュニティというものが育んでくると、そこには自ずから地域に対する愛情、地域愛、また住民同士のしっかりした愛、繋がりといいものが出来ていくのであります。隣は何をする人ぞ、これでは何一つ出来ないといっても過言ではないわけでありまして。そういう無責任地域というふうにならないために、やはり今私がずっと繰り返し申し上げてきたような動きというのが、今本当に最も必要なわけでありまして。そして、町づくりの原点というのは、先ほどから言っておるように「自分達で汗をかけ」という事。俺達が住んでおる地域は俺達が汗をかかなければ誰がかくんだ。これを徹底的に夜なべ談義でも訴えてきました。他力本願では絶対駄目です。

随分前、議員の頃ですけれども、議員で研修視察に三重県のある地域に行きました。この町ではいわゆるある地域にため池があったわけですがけれども、その地域の人が行政の力も何も借りないでそのため池に、自分達の手で船を浮かべて、そしてボートを浮かべて、周りのミカン畑を観光農園にというそんな事も始めたり、そこへ小動物を飼って子供達が来て遊んで喜んでくれるようなものも自分達の手で作上げたんです。そしたらその地域はですね、町の中で一番そこへ多くの町内外から人が訪れるようになってきたわけです。町としてはびっくりしちゃって、行政としても何とかバックアップせにゃいかんじやないかという事で、それから町としてもいろいろ良い施設を作ってくれるようになったわけでありまして。説明にその町の町長が来てくれましたので、私は質問の中でですね、「こういうやり方をすると不公平さというのが出てきて、いわゆる色々他の地域から文句、色々クレームが付きゃへんか。」という事を言いました。そしたらその町長いわく、「それは仕方がないよ、その地域にやる気がないんだから。こういうやる気のある地域をその地域は見習って、じゃあ俺らもやらなしょうがないという事になってくるで、必ず今は色々言われても良い結果が出てくる。」こういう事を言われました。いや本当にこれが町づくりの原点だと思いました。議会の時にそれが頭に焼き付いておりましたので、議会の頃でもそういう運動をしておりましてけれども、町長に就任してすぐに議会で議員の皆さんの前で就任の挨拶と同時に第一声にその話をしまし

た。「あなた達がリーダーさんとして地域をしっかりまとめてこういう事をやらなければ、それはやる気のない地域にいくら補助金を出したって絶対に失敗しちゃうから、まずリーダーさんが必要、それは議会議員がリーダーシップを取らなかったら誰が取るんだ。」というような事を僕も長い間議員をやっておりましたので、まさに仲間同士でありますので随分強い事を言いました。それは本当にその後大きな力になってきた事は確かであります。

3. 行政は仕掛け人、地域のリーダーづくり

いわゆる就任当初すぐに町づくり課を作ったのもですね、これも先ほどちょっと触れましたけれども、熊本の小国町のやり方がそうであります。小国町は企画班というものを作りました。いわゆる一般行政とは全く離れた状況で地域興し専門にどこの部署でも入れるような形でやらせました。行政というのはですね、何と言っても仕掛け人であるわけであります。住民のこの地域を何とかしていきたいという熱き思いとか燃える心というものをね、どのようにかき立てていくか、どのように仕掛けていくかというのが行政であります。そしてそれが動きだしたら如何にどのようにバックアップしてやってやるかという事。初めからこれを行政がやるやるとやれば、もうその地域の人間はみんなだらけちゃいます。そういう状況に非常に気が付いてきまして、そういう状況の中では、やはり議員だけのリーダーでは駄目。まあ議員さんがおみえだったら申し訳ないですけども。従って地域の住民にリーダーさんになっていただく。あいつはやる気が随分あるからあれをリーダー格にみんなで作り上げていこう。当時から町づくり全国大会というのがあるんです。今年は第24回を迎えておりますけれども、旧額田としては、これに3回も4回も行かせました。全国、九州や北海道など色々な所へ1泊か2泊ぐらいかけて行くんです。これを行政で一般の人間に、やる気のある奴を集めて行かせました。行政の手で公費で行かせるなんて事はちょっとおかしいじゃないかという議員さんもおりましたけれども、必ず力になるという事でやってみました。確かに帰って来てですね、後のビデオにも出ますけれども、もう全国から自分達の地域を何とかしないといかんというその熱意がもの凄く伝わって、俺達も帰って行ったら、私達も帰って行ったら何かをやらなくかん。本当に芽生えました。今もそういう人間達はしっかりと地域でリーダーさんをやっております。リーダーなんてあんまりおると船頭が多くなって良くことわざでありますように、船が山へ登って行っちゃいますので、とにかく地域の中で数人のリーダー、そういうものをしっかりと作っていくという事が必要であります。リーダー養成というのはずっと続けておりまして、今頑張っておってくれます。

その中でたまたまですね今年は、愛知県が開催県になりました。嬉しい事にですね、会場が私達作りあげた茅葺屋敷が全国から来てくれる会場に岡崎がしてくれました。これも本当に光栄です。わたしもちょっと話をする事になりましたけれども、全国の町づくりの熱意ある人間達を集めて話をするという事も本当に光栄でございます。11月10日から11日、1泊2日で桑谷山荘で泊まって夜なべ談義をやって、そして全国のそういうメンバー達と話し合うわけです。勿論以前からあったものも数団体ありましてし、手前味噌で言っているわけではなくてですね、地域づくりグループというのが有り難い事にこういう動きをやりましてから私が辞めるまでの約6年間でなんと35団体誕生し

ました。みんな一生懸命やとってくれます。まだまだやと芽が出たグループもありますし、日近の太鼓はそこら中でやっております。民放でも色々な機会に取り上げていただいておりますが、NHKのクローズアップ現代で取り上げられた2件についてご紹介させていただきます。【ビデオ上映】

ちょっと付け加えたいのは、実はこの中でも色々話が出ておりましたけれども、初め確かにこの茅葺屋敷を交流の拠点にして行こうという事について、確かにみんながみんな賛成ではなかったわけなんです。それで私も夜遅くまで本当に地域の皆さんと夜なべ談義という事をやってまいりました。その時に、「あんな茅葺きはもしこの辺が火事になったら、あそこから火が出たりしても危険でしょうがない。はっきり言えば潰して欲しい」というような人もおりました。その時に、反対する人と「じゃあ何が良いんだ」という事を色々話をしました。そうしたら「農道に舗装してくれ」とか、「林道に舗装してくれ」とか、「道路も何々を広げてくれ」とか言いました。「当然それは、行政の永遠のテーマでみんな一生懸命やってきたじゃないか。今それを辞めてしまうというんじゃないくて、いくらそういう事をやってきても残念ながらこのまま行けばこの集落は俺とお前が残っちゃっただけだなという時が必ず来るぞ。我々も博打だけど、未知の世界だかわらんけれども、とにかくみんなで作って見ないか。」という事で訴えてきました。それが本当に有り難い事にあの過疎地にですね、100人、200人、300人という単位でみんなが訪れる。もうそんな事になるとはあの地域の人達が誰一人考えた事もなかったと思います。こんなふうの良い方向になっていくという事ははっきり言って思っていなかったと思います。有り難く思っています。

4. 地元学

地元学というものがありますけれども、これはある大学の先生が名付けたそうです。、財政的に旧額田の場合非常に厳しい状況でありましたので、無いものねだりはやめよう。地元にあるものをどうやって掘り起こすか。地元には素晴らしい自然があり歴史があり文化があり伝統があり、色々慣習があります。良いものはあまりにも近過ぎちゃって気が付かなかった。今の茅葺きでもそうです。隣近所に住む人は、あれは邪魔くさいという、こういう考え方でありました。余所からあそこへ随分写真を撮りに多くの皆さんが来ておられますが、やはり外の目、余所から見る目、外から見る目というのが必要なんです。そういう形で掘り起こして、そこに光るもの、誇れるものをみんなで作っていきこうという、これが大変必要であったわけなんです。そういう気持ちにみんながなってくれたという事でございます。そしてもう一つはですね、今、名古屋大学で名誉教授をやっておられる田中先生が、今全国の町づくり講演にいろいろ廻っておられます。合併の1ヶ月前、去年の11月にですね、愛知県の大講堂で県下の市町村の企画の幹部達を全部で百何名集めて講演があったそうです。その時に旧額田の企画の課長達も行っておりました。真っ先に流していただいたのが先ほどのビデオだったそうです。ビデオが終わってから、「おい、額田色々取り組んでいる事はその後どうなったや。」という事を逆に質問されてびっくりしちゃって、企画課長は嬉しくて、「こういう状況でやっております。」という事をおこたえし、帰ってきて早速私の所に報告に来てくれました。本当に私も合併間近の状況の中で、光栄な事を田中先生が言っていたなと。実はそれ以

後早速手紙での色々なやりとり、親交を温めておりますけれども、そんなような事があります。

それから放映後ですね、やはり発信する事が大事だという事を感じました。北は北海道、南は九州の人達まで、大きな団体というよりも行政マンが多かったですけれど、すぐに視察の申し込みがありました。次から次へ。それはまだ出始めたところで、まだ見せられる状況じゃないという事で随分言ってお断っておったんです。完成まで100年かかるかもしれないし、何十年かかるかもしれない。しかしそういう地域の人達をどのようにまとめたかとか、ただで全部借りたり等いろいろな事をやってきたりその手法ですね、そういう事が聞きたいということでした。やっぱり何といたってもとにかく地域の皆さんと泥まみれになって作業着で、みんなと同じ目線で酒を酌み交わしながら、「こんな事はほかっておけばこの集落はこれでもう駄目になるぞ。」というその位の厳しい事を言ってみたり、「お前達みたいにやる気の無いような所なんか本当に駄目になっちゃうぞ。」というぐらいの事まで言って、そういう目線で夜なべ談義というものをやってきたお陰だと思っております。

それで外へ如何に発信していくか、何故発信が必要かという事ですが、まず知名度を上げるという事なんです。一番良い簡単な良くわかる方法は万博です。地球の裏側から日本の愛知なんて事はまったく知らなかった人たちが、今回の万博のお陰で愛知を良くわかってくれました。非常に経済効果がある。また、北海道の富良野は皆さん良くご存知の事でありまして。富良野の隣にある町があります。ちょっと名前は伏せておきます。全く同じ風土気候条件、全く同じ状況下の中で隣の町と富良野の町と同じ馬鈴薯を作ったと致します。それが皆さんの隣の八百屋さんに並んでおった時に、これは富良野の馬鈴薯だよ、こっちは名もなき隣の同じ条件下で出来た全く同じ味の馬鈴薯ですといてもですね、みなさん富良野の馬鈴薯が一文高くても買っちゃおうと思います。先にそっちが売れちゃうと思います。これが全てなんです。これが経済効果。如何に地元というものを発信していかなければいけないか。

私達も愛知山村展で、額田、作手など奥三河の地域、14ヶ町村で山村連盟を作って、1年に1回名古屋のテレビ塔の下の広場で、愛知山村展で色々町の宣伝をする時にですね、そこへ来往した方々の1200人のアンケートを取りました。私達の町に結構来てくれるなどと思っておたら、「どこの町へ一番行きますか」という質問に、どうでしょう、額田は14ヶ町村でどべから3番目、11番目でびっくりしちゃったんです。どうやったら額田に来ていただけるか、どうやって知名度を高めるかという事の必要性もそういう所から非常に分かったわけです。

5. 森林の崩壊

国内材が外国の材に負けてしまって価格破壊をおこし林業家が赤字になっちゃうからという事で、手をいれなくなって育樹放棄状態であります。子供を育てるのを放棄するのと同じで育樹放棄をしております。2メートル間隔ではじめ植えて、早いこと下草が抑えられるようにして、そして間伐をして立派な林を育てるわけですけども、その間伐というのが全くされなくて、今山の中に入ると多くの山が真っ暗闇でございます。草木一本生えていない。雨が降ると土砂が流されてしまっただけで一旦水がさっと出て、少し天

気になるとすぐに水が退いてしまう。だから川の水も減って、鮎も変な病気が出て、雑魚も住みにくくなってきてしまいました。水が少ないから家庭雑排水で少し汚れただけでも汚染濃度が濃くなっちゃうわけです。それが大きな原因であります。じゃあですね、今外国材がもう日本の中でシェア 83% 占めておるわけです。だから日本材というのは17%しか使われていない。長野県のあれほどの山奥まで地球の裏側から木材を持っている。裏山にたくさんの木が生えておってもそれを使わないような状況になっちゃったんです。日本の材は使わないから駄目になって、森林が駄目になってきちゃったわけです。

では一方外に目を向けてみるとですね、おわかりの通り、1960年代くらいから東南アジア、フィリピンをはじめとして、インドネシア、マレーシア等で乱伐をどんどんしてその辺の生態系が狂ってしまっています。その地域の原住民がですね、何でこんなに俺の所の山の木を切って、日本は持って行くんだという事で、はじめ生態系が狂っちゃうという事で色々反対運動を起こしました。しかしその国としては外貨獲得の為にはそれしか手がないという事でやるわけですけれども、軍隊が鎮圧して死者が出たこともあります。その原住民達は、俺の所の地域の森を乱伐しちゃってたまらんという事で日本の政府に抗議にわざわざ来ている。その時に飛行機で日本の上空に入った時に、飛行機の窓から見た日本の森林はこんなに緑がいっぱいあって、何でこれほど木がたくさん生えておるのに、私達の遠くの国まで来て伐採していくんだという事で、呆れて帰っていったという事を聞いております。現在、世界の森が1年に大体日本の面積の半分ぐらい木材を切られておるそうでありまして。2年で日本の面積ぐらいの森林が切られておるわけです。このまま行くと東南アジアの方は全部ストップがかかってしまって、シベリアからカナダ、アマゾンこういうふうにどんどん移っていくわけです。100年経つと大体地球の主な森というのが無くなるそうです。地球の森がなくなったら地球に住んでおる人類は間違いなく無くなってしまいうわけです。それだけ森林というのが酷い状況になっておる。二酸化炭素の問題もご承知の通りです。ここでちょっとデータがありますけれども、二酸化炭素、人間が一人1日排出する二酸化炭素が150グラムだそうです。自動車一台が1日走ると、この1000倍、150キログラム、これだけの二酸化炭素を排出するそうでありまして。小さな車でも人間の二酸化炭素を出す量の1000倍あるそうです。よく子供達の授業でも言っているんですけども、エジプトの王様がですね1000人の奴隷の御神輿の上に乗って毎日歩いているのが今の社会です。江戸時代の江戸幕府へ参勤交代に殿様が家来を1000人連れていつも歩いておる。これが今の車社会です。しかし車社会を今やめる訳にはいかない。絶対にやめる訳にはいかないから、では如何に森林をこれから大事にしていくかという事がおわかりだと思います。

しかし日本の森というのはもう全然外材に押されちゃって相手にされなくなってしまっているんです。私は何とかして駄目だ駄目だというから余計にチャレンジしようという事で今は真剣に毎日ジーパン姿でがんばっております。今その森林レクリエーションという形で、いわゆる都会の多くの人達に日本の森林の現状というのを知っていただいて、それで世論を動かし政府を動かさないと残念ながらこれはもう変わらないわけです。森林地帯に住んでいる人間というのは本当にわずかなんです。愛知県の場合をひとつ例を取り上げても今730万人愛知県の人口があると、森林地帯というのは大体40%

ありますが、森林地帯に住んでいる人間というのは8万何千人です。全体の1%ぐらいしか住んでいないんですよ。だから森林の状況、そこにおる人間達の状況というのを知っていただくという事がなかなか出来ない。だから是非こうして合併して多くの皆さんに知っていただき、こういう危機感というのを現場に来ていただいて知っていただくという事が必要だと思っております。そんな中で私達もログハウス等で町の人達に山を貸してあげて、山を良く見て貰うという事にも力をいれています。森林の崩壊というのはこういう状況でございます。

6. 日本人の心のふるさと

日本人の心の故郷でございますけれども、やはり「兎追ひしかの山、小鮎釣りしかの川」こういうイメージが何と言っても日本人の心の故郷だと思います。その中で、故郷についてこんな話を聞いた事がございます。これは色々な所でもお話させていただいております。実はですね日本の文豪、島崎藤村さんの事でございます。私が色々手紙や何かの書類のなにか今日でも載せてありますけれども、「血につながるふるさと、心につながるふるさと、言葉につながるふるさと」この詩でございます。藤村の詩であります、これが大好きであります。こういう話をいつもしておりますので、私の友人が「私は藤村さんの本当の孫を知っているから紹介してあげる。」という事で、2ヶ月前に茅葺屋敷で藤村さんの本当のお孫さんとお会いして一緒にお酒を飲みました。この2、3日前にもある所でお会いしまして本当に嬉しかったですけれども。そういう藤村さんがですね、この詩を作ったという事を是非ちょっとご披露したいと思っております。ご承知の通り藤村は故郷は信州であります。故郷は神坂村という、まあ神坂と書くんですけれども、この母校の小学校で久しぶりに藤村が帰って来るという事で、村人達がですね、おらが藤村が帰ってくるという事で、もう近隣の村々の人達を呼び込んで、講堂が溢れんばかりの人が集まってきたわけです。そこへ藤村が久しぶりに帰ってきて、講演があるという事で話が始まったわけです。藤村がとにかく演壇でこうやって立ってじっと長い間静かにしておった。どんな言葉が出るかなという事でみんな非常に期待しておったそうです。そしたらですね、どんな話になるかなと思ったら、今お話した「血につながるふるさと、心につながるふるさと、言葉につながるふるさと」「血につながるふるさと、心につながるふるさと、言葉につながるふるさと」たったのこの三行。たったの三行だけ喋ってですね、もうあと何も喋らなかったそうです。そうしたら会場、満員の会場の中で、一人、二人、嘸り泣く声が漏れ始めて、そして段々段々その泣き声が大きくなっていった連鎖反応を起こして、その会場の中にもうみんな泣き声の大合唱になってしまったそうです。このように人は誰しも故郷に限りない愛着と愛情を持っておるわけでありまして。これはですね、何と言っても幼い日々に友達と日暮れを忘れて戯れ遊んだ山があり、そして川があり、そしてそこに澄み切った水があり、そこには降り注ぐ日の光とそよ風に揺れる緑が美しくあるわけでありまして。そしていつの日にも変わらない悠久の時の流れの中で、各村々の人達は心を寄せあってですね、助け合って生きてきたわけでありまして。故郷の山河というのは正にこのように遊びの場でありました。そして生活の場でもあり、勉強の場でもあり、仕事の場であったわけでありまして。これは何と言っても日本人の心の故郷だと思います。故郷と言えば現実的な自分の生まれた都会が故

郷の人達もいっぱいあるわけです。しかし心の故郷というのはやっぱり味噌汁の味があって、味噌汁の匂いがして、そしてお袋の温かさがあって故郷っていう、心の故郷というのが文部省唱歌にも唱われているような状況だと思うわけであります。しかし残念ながら、今日本の70%を占めているこういう農山村が先ほど言ったように非常に荒れてしまっておりまして、過疎が進行して、今は子供の声も聞くことが出来なくなっております。そして今はその場は生活の場では無くなってしまっていて、ましてや仕事の場でも無くなってしまいました。そして山道は本当に雑草に覆われちゃって、車も人間も入れないような状況になっております。そして先ほど言ったように間伐がされず山が本当に放置されています。まさに今日本の森林というのは先ほどの外材に徹底的に圧されて緑の砂漠と言われております。これは本当に見事な表現であります。空から見る緑も、中に入ったら本当に酷い状況になっておるわけでありまして、それが緑のダムの効果が無くなってしまっています。間伐をする事によって陽をどんどん入れて、そしてそこから自生してくる広葉樹や落葉樹が出てくるわけです。もう木が大きくなっちゃえば下から広葉樹が大きくなっても決して大きな木が抜かれるような事はないもんですから、そういう理想の山を今日本の森林が全て求めておるわけなんです。今は林業家の、山を持っておる方々は毎日の生活の為にはどうしても会社に行って稼がないとやっぱり家計がやっていけないという状況であります。まあそういう事をやはり世論の力、政治のちょっとした匙加減というのが必要なんです。環境を守るといのは経済の事だけを考えておれば決して出来ないわけです。面積が凄くあってもそこには人間が住んでない。一票の重みというのもあります。政治家ももうそういう地域から育たないんです。人口の多い所でやはり周り近所のどぶ板をはめていくというようなそういう政治でないと次の選挙に出れない。こういう今の日本のシステムの政治、それではですね対極的な考え方で日本国土全体を考えるとこの事なかなか出来ない状況になってしまった世の中でありまして、これをどうか理解していただきたいと思っておるわけでありまして。

7. ふるさとに密着した教育

最後にもう一つだけ申し上げたいのはやはり教育の問題です。これは「町づくりとか地域づくりというのは人づくりから」と言われております。何と言っても教育であります。そして教育というのは未来への大きな夢の架け橋、未来への大きな投資であります。子供達がしっかりふるさとについて学んで欲しいという事です。先ほど私の小学校でもやっておりますけれども、今故郷大好き教育というのを一生懸命やっておってくれます。一番申し上げたいのは故郷の歌の3番にあります「こころざしを果たして、いつの日か帰らん」という歌詞です。この「こころざし」という事が本当に必要なんです。「こころざし」はあるか、そして地にしっかり足を着けておるか。実は、長誉倶楽部で色々勉強をやらせておられますが、深田さんの会報の中に掲載されておった事が実は私本当に感動しました。いろいろ引用させていただいております。これを最後の紹介させていただいて終わりますけれども、「こころざしはあるか、地に足が着いているかと常に自分を見つめる事が必要である」という事。人はこころざしを深く語る時ゆるぎない人生に頷き合う事でありまして。そして人は故郷をですね、熱く語る時に共有の魂に共鳴しあうものであります。これは島崎藤村の詩と同じであります。故郷の事を語る時にやはり共有

した魂が燃えるわけであります。岡崎の事をみんなでいいようにやろうじゃないか。やはり魂がみんなで燃えなきゃいかん。そしてやはり深い志と熱い故郷愛、郷土愛ですね、こういうものが教育の中でしっかり入れていっていただく事が子供の頃から人格を整えてくるわけです。そういう事があれば、子供の頃から故郷が好きだといくら東京にいても故郷にはお父さんお母さんがおる。兄弟がおる。そういうしっかりした絆があれば今あんな凶悪な事件なんか絶対に人間っていうのは起こしません。そういう事から故郷を愛する気持ちという事が必ず人格を整えていくという、こういう事であります。俺の故郷なんか駄目だなんて言っている人間は本当に駄目なんです。実はある俳優でちょっと余談ですけども自分の故郷を語れない。故郷には良い思い出がないから語れないという俳優がおるわけです。全く残念です。俺の故郷はと語れるにはやっぱり子供の頃から本当に故郷大好き、故郷に密着した教育を進めていければですね、それをもって故郷の事が言える。山や川しか無いねえと言っているような事ではですね、残念ながらやっぱりしっかりした人格が育たないと思います。まあ教育の現場で頑張っておっていただける方もありますので、どうかこの事も是非心の片隅の置いておいていただけたらと思います。つまらんお話をして10分も超過した事をお許しいただきたいと思います。もっともっと用意しておりましたけれども、また良い機会がありましたら是非宜しくお願い致します。ありがとうございました。